

後援会だより

「グループ学習」から「研究室所属」へ

学類長 入野 修

共生システム理工学類では、地球規模の環境問題、エネルギー問題などの複雑な課題を解決できる人材を育成するため、学生自らが問題を抽出し、解決する実践力を身に付けるよう指導しています。そのため、入学時に自主的に学ぶための導入教育を実施し、年次進行とともに少人数のグループ制度による修学指導を実施しています。

入学時の約20名から成る「課題学習グループ」では、大学生活を有意義なものとするために、グループアドバイザーが親身になって修学や学生生活に関して相談に乗ります。2年次の専攻所属後の「課題探求グループ」では、自主的に探求する課題と相談できる教員を決定し、この主体的なプロジェクト学習を4～5セメスターで展開します。この学習の「合格」が次の「課題追求グループ」の条件となります。



「課題追求グループ」(研究室配属)については、学習案内に提示した配属の条件を満たした学生に研究室希望届を提出させ、3年次後期に配属が決定されます。定員枠を超えた場合は学業成績(GPA)で決定され、面接を行う研

究室の場合は、半数はGPA、半数は面接により決定されます。したがって、この制度では、入学当初から所属したい研究室を明確に決めている学生は、常時高いGPAを得るよう努力することになります。一方、第1希望の研究室に所属できない学生もおり、実社会では自分の本意でない選択を強いられる場合もあることを体験することになります。今年度は最初の研究室配属であり、いくつかの課題が出ましたが、それらを解決したので、次年度にはさらに学生の立場を配慮した配属決定が行えるでしょう。現在は、希望届を提出した全学生の研究室配属が決定し、学生たちはそれぞれの研究室での「課題追求グループ」を開始しています。

「課題追求グループ」では、卒業研究に関わる科目の「演習」や「卒業研究」を受講します。それらを通じてさらに密度の高い教員と学生による双方向型の良き緊張関係が醸成されて、研究テーマの遂行と進路に関する修学指導が行われます。大学生活のほとんどの時間を研究室での学習に費やすようになるため、大学生活を有意義なものとして満喫できることでしょう。分野横断型の思考様式の教育環境の中で自主的な学習活動を展開し、実社会において、人・産業・環境の共生のシステム科学的なモノの捉え方を実践していくことを期待しています。



学業優秀者賞受賞式

— 5月23日(水) —

学業優秀者賞を受賞して

環境システムマネジメント専攻
2年 遠藤 麻也

今回思いがけずこのような賞をいただくことになり、大変嬉しく思います。賞がいただけたのも自分一人の力ではなく、友人、先生方の協力があったの事だと思っていますので、とても感謝しております。

試験期間は、計画を立てて勉強をしました。試験期間には、試験だけでなくレポート提出も重なってくる事が多かったので、勉強時間を確保するためにも、レポートは早めに取り組みなど時間を有効活用するように心がけました。そのおかげで、十分に勉強時間を確保して、試験に臨む事が出来たと思います。試験では、緊張する事が多く、落ち着いて試験に取り組めるよう一呼吸おいてから臨むようにしました。授業では、分からなかったところなどは、質問をしに行ったり、友人と話し合ったりしながら、理解を深めていきました。特に友人との話し合いでは、教えてもらったり、自分が教えたりする事で、さらに内容について深めていく事が出来たと思います。友人達の協力というのは大きく、体調が悪かったりして授業を休んでしまった時もノートをとっておいてくれたりと、助けられる事が多々ありました。

友人達の助けは、勉強面だけでなく生活面でも、私を支えてくれています。これは、心強く、と同時にとても幸せな事だと思います。友人に恵まれた事で、私の大学生活はより充実したものへとなっているからです。

大学生活も二年目となり、授業内容もさらに難しく、より内容が濃いものとなってきました。授業についていくのも、一年のときと比べると大変な気がします。しかし、自分の知らなかった世界を知る事で新しい考えが生まれたりするので、消極的にならず積極的に知識を吸収していけたらと考えています。自分一人でどうしても分からないことなどがあつたら、質問をしたり、友人と協力したりすることで、解決していきたいです。

今後もこの賞を頂いた事を力に、成績を維持できるよう勉学に励んでいきたいと思っています。

環境システムマネジメント専攻
3年 渡部 康実

まず、去年に引き続き今年も学業優秀者賞という名誉ある賞を受賞できたこと心から嬉しく思います。そしてこのような賞を頂けたのは決して私一人の力ではなく、わからないことを相談し合えた良き仲間がいてくれたこと、またお忙しい中時間を割いてくださり、親切にまた丁寧に、わかるまで教えてくださった先生方がいたおかげであるからであり、ここに深く感謝申し上げます。

私はこの賞を通じて学んだことがあります。それはコミュニケーションの重要性です。仮に私に友達がいなかったら学業優秀者になることはできなかったと思います。わからないことを相談すること、これはただ単に答えを聞くことではなく、自分では想像することができなかった新しくてわかりやすい考え方を聞けるという素晴らしい行為だと私は思います。その考え方を吸収し、自分なりにアレンジして使いこなせるようになることが自分の実力アップにつながりました。つまり友人と良いコミュニケーションを取れたことが学業優秀者賞につながった大きな理由であると思います。また人とコミュニケーションをとるということは、将来社会に出て仕事をしていく上で必ず必要になっていくことであると思います。だから、日頃から友達を作ってコミュニケーションを取ることができるようになることは大切な事だと思いました。

逆に気を付けなければならないのが、学業優秀者になりたいがために自分が履修したい授業科目を変更してはいけないことです。例えば、自分が興味あつたり勉強しておいたほうが良いと思う授業だが難しそうで良い成績がとれないかもしれないという科目があると思います。そんな時皆さんならどうするでしょうか。迷ってしまう方はいないでしょうか。そんな時はぜひ迷わずその興味ある科目を履修して欲しいと思います。確かに学業優秀者になることも素晴らしいことです。自分が勉強してみたい科目を全て履修しその結果選ばれることに意味があると思うのです。

自分の興味ある勉強を第一に考え、その結果学業優秀者になれば何とも言えない喜びや達成感が味わえます。ぜひみなさんも頑張ってみてください。

平成18年度学業優秀者

1年 (11名)

遠藤 麻也・小西 航・吉田 創・丸山 愛
若色 美幸・小森 信央・荒井 浩平・櫻井 貴紀
小賀坂由姫・鈴木 優貴・山田 道子

2年 (13名)

木村 直・伊藤 光輝・安沢 孝太・畠山 香里

三浦 弘貴・東条 聡子・渡部 康実・影山 裕太
宍戸 仁美・アルディア・ジャンティ・福田亜由美
荒井 隆之・早川 嶺太

平成18年度学類長賞受賞者

伊藤 光輝・木村 直・安沢 孝太・畑中伸一郎
湯浅 浩之

学類長賞受賞式

学類長賞を受賞して

人間支援システム専攻
3年 湯浅浩之

この度は学類長賞という大変栄誉な賞を頂きまして、誠にありがとうございます。御指導下さった先生方に心より感謝申し上げます。

今回、この賞を頂いた「ロボット学習用キットの製作とそれを活用した地域での製作教室の開催」では、マイクロコンピュータを使用したロボットシステム「ライトくん1号」というロボット学習用キットを製作し、製作したキットを子供たちに実際に作ってもらおうロボット製作教室を開催しました。ライトくん1号とは、床に描かれた黒いラインに沿って移動するライントレースという機能を持ったロボットです。

このキットで、私はマニュアルの作成を担当しました。このマニュアルは「キットの説明」、「回路作成の仕方」、そして「動作原理・プログラム・部品の説明」と、大きく3つに分けることができます。その中で、私が最も重要視したのが回路作成の部品の取り付けの部分でした。ライトくん1号に使用した部品は数が多く、似たような色や形、取り付ける向きがあるので、ここで間違える確率が高いからです。そのため、このマニュアルでは文章をなるべく少なくし、写真や図を多く使い、見るだけで作業の流れがわかるよう工夫しました。

完成したマニュアルは全36ページ、使用した写真や図は150を超えました。マニュアルを作ったことで、多くのことを学びました。

開催されたロボット製作教室では、作成したマニュアルを見ながら作業に取り組んでもらいましたが、実際には部品の取り付けミスが多く起こってしまいました。またこのようなマニュアル作成の仕事をするのであれば、この経験を生かして、より読みやすく、見やすく、理解しやすいマニュアルを作りたいと思います。



—10月17日(水)—

人間支援システム専攻
3年 畑中伸一郎

教育用ロボットキットの製作と、それを活用した地域での製作教室の開催が評価され、学類長賞を頂くことができました。このことについて後援会だよりに文章を載せる機会をいただきましたが、湯浅君とは少し違ったことを書くと思います。

ロボットキット製作には、とても時間がかかりました。創造工房ゼミの授業の一環だったのですが、遅い時は夜中まで作業をしました。こんなのは高橋ゼミだけでした。私は、ゼミがあるたびに福大の友達に報告しました「昨日は終電の時間まで作業してたよ〜」。当然、友達の反応は、「うわぁ〜、大変だねえ」「俺、そんなの嫌だわぁ」です。みんな正直。

ある日、他の理系大学の友達と飲みに行く機会がありました。各大学の勉強内容などで話が盛り上がり、私が創造工房ゼミの話をしました。「一番遅い時は、二時過ぎまで…」もちろん、私は内心で、「すごい〜」の言葉を待っていました。しかし、返ってきた言葉は「へえ〜、普通じゃん」でした。よくよく話を聞くと、他の理系大学では一年生の時から大学に泊り込みで課題を仕上げることもある、とのことでした。大学で寝て、そのまま次の日の授業に出ることも普通らしいです。それが、大学で認められていることなのかは知りません。しかし、他の大学はそこまで勉強していることを知り、驚きました。

福大の理工学類のカリキュラムでは、時間が掛かりそうな授業と、難しい授業は避けて通れます。しかし、そのことに甘んじるのではなく、各自がもっと理系らしい心構えで、学業に励まなくてはいけないと思います。福大は、他の大学と違い、広く浅く勉強していきます。広く勉強することは、考え方の視野を広げるので良いと思いますが、しっかりと勉強しないと何も得るものがなくなります。理工の後輩たちがどのような学習スタイルをとっているのかわかりませんが、自ら必死で学習する姿勢を身につけ、学習したことを地域での活動にフィードバックさせることができる理工学類の文化が出来上がることを期待します。



共生システム理工学類の海外演習について

海外演習実施計画委員会

3年前に創設された共生システム理工学類では、第1期生である現在の3年生が入学した時点から、第5セメスターに海外演習（選択科目、2単位）を実施することを計画してきました。具体的な海外演習計画については、2006年度初頭から学類内にワーキンググループを設置して準備を開始し、2006年10月からは海外演習実施計画委員会を学類に設置し、具体的な演習計画を立案しました。また、委員会では学生アンケートや学生説明会を実施するとともに「海外演習の手引」を作成し、各種手続きや事前準備を進めました。2007年度当初には3つの専攻ごとに海外演習実施計画を準備し学生に提示しましたが、教員引率型の海外演習として実際に行ったものは、環境システムマネジメント専攻が準備したベトナムでの海外演習だけです。今年度は個別認定型としてアメリカでの海外演習も実施しました。

今回の海外演習に参加した学生に感想を尋ねたところ、語学力向上の必要性を感じたり異文化への関心が高まったりしたという感想のほか、途上国における水環境や都市問題の重要性について認識が深まったとか自分の将来を見つめなおすきっかけになったという感想を聞くことができました。参加学生数は少なかったものの、海外演習を実施した成果が現れていると評価されます。

アメリカでの海外演習

環境システムマネジメント専攻
白川 百合恵

私は2007年4月にアメリカのジョージア州にあるサペロ島という島で、約1ヶ月過ごしてきました。コーネル大学の学生と一緒に一酸化炭素酸化細菌をターゲットにした分子生物学的実験方法の講義を受け、実際にフィールドに出て活動しました。

初めて海外へ行くという経験だったので、パスポートを取得したり航空券を探したりと準備から戸惑うことばかりでした。また、初めての土地で生活することへの不安がとても大きかったです。私にとって一番の課題は、英語が通じるかどうかでした。実際にアメリカでの生活は、英語が通じなくて困ることが多々ありました。サペロ島では、ジョージア大学の寮にみんなで生活し、食事の時間、部屋での過ごし方、その他いろいろな生活の場面で自分の英語能力の低さに落ち込む毎日でした。実験の班が同じ人とはコミュニケーションがうまくとれず、操作を間違ってしまうこと



もありました。しかし過ごしていく中で徐々に溶け込めるようになり、相手の伝えようとしていることや自分の言いたいことを言えるようになりました。また授業は英語で行なわれていたのではほとんどついていくことが出来ずとても焦っていましたが、引率して下さった難波先生に授業後その内容を教えていただき、何とかついて行くことが出来るようになりました。しかし慣れた頃にはすでに1ヶ月が過ぎようとしており、初めは日本に早く帰りたと思っていましたが、サペロ島を離れるのが残念でした。

コーネル大学の学生と一緒に過ごして感じたことは、夜遅くまで集まって勉強したり、天気の良い日は外でテキストを広げたりなど、とても勉強熱心だということです。遊ぶときは思いっきり遊び、自分でけじめをつけて生活していました。私もそれを見習って自分で考え、けじめのある生活を送れるようにしたいです。今回の海外演習に参加した経験は、これからの人生に大きな影響を与えてくれると思います。このようなすばらしい機会をくださった難波先生に改めて感謝いたします。ありがとうございました。



海外演習（ベトナムコース）

環境システムマネジメント専攻
3年 阿部将平
環境システムマネジメント専攻
3年 浦島あやか
産業システム工学専攻
3年 富田優

私達は、平成19年9月13日から9月25日まで、ベトナムで海外演習を行いました。

まず、海外演習へ参加するための準備として、週に一度準備講座を受けました。主に、①ベトナムの自然や水・環境問題②都市・地域問題③歴史と文化の3分野について学びました。

次に、ベトナムでの演習内容および日程ですが、以下のようになります。

9月14日、ハノイ国家大学を表敬訪問。ハノイ自然科学科大学でGiang先生、Anh先生、調査に参加するベトナム人学生のNhuさん、Thuyさん、Nhungさんに自己紹介を行い、その後学生だけで地下水調査について打ち合わせを行いました。

9月15日、郊外の開発地域であるMydinh地区へ行き、新都市計画地の見学をしました。その後、レーニン公園のバイマイ湖を見学し、更に我々の宿泊場所であったゲストハウス付近の水路の水質調査を行いました。

9月16日、ホアビンダムの見学。貯水量は94.5億tで、国内の大部分の電力供給をこのホアビンダムの水力発電が担っています。

9月17日、CERWASS訪問。ベトナムの水供給の現状について説明を聞き、意見交換を行いました。CERWASSでは、安全な水を供給するために様々な活動が行われているそうです。更に、ベトナム科学技術アカデミーへ行き、水の浄化装置についての説明やベトナム人学生の研究内容について話を伺いました。

9月18～21日、ハノイ周辺の地下水調査。地下水調査で測定したものはヒ素濃度、ORP、pH、EC、NH₄濃度、Fe濃度、水温の7項目です。調査期間中には、ハロン湾へ



行き、水環境や鍾乳洞を見学しました。

9月22日、報告会用のパワーポイント作成。さらに、Hang Bai通りとTrang Tien通りの交通量調査を実施しました。

9月23日、前日同様、パワーポイントを作成し、報告会の準備を行いました。

9月24日、Nga Tu So通りで交通量調査をしました。その後、現地報告会に参加しました。報告会では、私たちとベトナムの学生がそれぞれペアを組み、現地で行った水質調査の結果を中心にそれぞれ班ごとに発表しました。

以上が主な演習内容でしたが、改めてベトナムでの約10日間を振り返って、やはり一番強く思ったことは「語学の重要性」です。リスニングに関しては、根気よく説明してもらえればある程度理解することが出来ましたが、自分の意思を相手に伝えることがほとんど出来ず、今でも悔やまれます。しかし、今回の現地での活動は私たちにとって非常に貴重な経験になりました。特にベトナムの学生は研究熱心で、物事への追求心が非常に強く、大きな刺激を受けました。国内研修の段階で、この海外演習に参加するかどうか迷っていた時期もありましたが、他の学生には体験できなかったことを私たちは体験することができ、またそれによって一人ひとりが大きく成長できたと思います。

最後に今回このような貴重な体験が出来たのも、先生方や後援会をはじめ、多くの方々の協力があったからこそだと思います。本当にありがとうございました。今回の経験を糧に、残り約一年の大学生活を今まで以上に充実したものにしていきたいと思っています。



平成19年度のインターンシップを振り返って

就職支援委員会・インターンシップ委員会

福島大学では、学生の職業に対する認識を深め、自分の将来をデザインしながら大学での学びの意味を考えるようなカリキュラム体制を敷いています。その一つの要が、企業や自治体などの事業体で就業体験を行う授業である「インターンシップ」です。以下に今年の本学類のインターンシップの概要をご報告します。

今年は就業体験先としての協力を申し出て頂いた事業体が27にものぼり、13名の2年生と5名の3年生の計18名が、16の事業体で就業体験を行いました。受け入れにご理解頂いた事業体の数、受講者とも、昨年より大幅に増加しました（図1）。ただし、在学生数では少数派のはずの女子が積極的に履修する傾向は、今年も健在でした（図2）。

各受講生は、面接、事前学習・マナー講座を経て、8～9月の夏休み期間中に事業体で1週間から2週間の就業体験を行い、終了後にレポートの提出と事後報告会を行いました。東邦銀行人事部によるマナー講座では、これまで意外に知らなかった社会常識やルールを真剣に学ぼうとする姿が見られました。事後報告会は事業体の担当者11名を含む、約65名の参加者を得て10月10日に行われました。力の入った（入りすぎた？）プレゼンテーションと活発な質疑応答のため、30分ほど予定時間をオーバーしてしまいましたが、全員が各自の体験を活き活きと報告しました。報告会終了後に行われた懇談会では、事業体からの出席者に事業内容や仕事について積極的に聞きに行く学生の姿が見られました。今後、レポートなどの審査を経て、就業体験期間の長さにより、1単位または2単位を取得することになります。

本学類では、もっと多くの学生をインターンシップに参加させたいと考えています。そのため学生への広報をより活発に行うほか、より多くの事業体にご協力をお願いすべく、準備を進めているところです。

最後に、事後報告会は後援会より費用および人員面でご協力賜りました。ここに御礼申し上げます。

ご協力いただいた事業体及び参加報告書は学類ホームページでご覧いただけます。

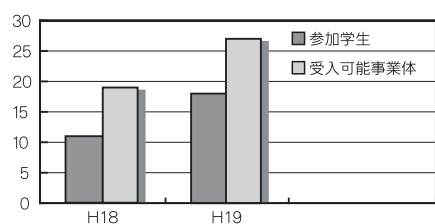


図1 参加学生数、事業体数の変化



図2 参加者の男女の割合

インターンシップ体験記

人間支援システム専攻
2年 渡部 洋輔

私はNTT東日本一福島のSE業務の職業体験に参加し、8月20日から10日の実習を行った。業務体験では設備見学から現場の作業まで多岐に渡り、多くの知識を得ることができた。

福島県の通信事情、05年に光通信（Bフレッツ）の増加がADSLを超え、現在のブロードバンド回線22万の内、光通信が10万、ADSLが10.7万とほぼ同数に迫り、NTT東日本での普及率は21支店中5位と比較的早い。しかし、山間の世帯が多く、面積が広いので敷設、普及の妨げになっている。さらに高齢者世帯であれば従来の光通信の利用は見込めないため、医療や近所付き合いに使える新たな端末を提供する必要がある。

業務体験の募集にはSE業務となっていたが、実習以外にも工事現場や通信設備の説明等も多かった。NTT東日本一福島が県全体で行うSE業務は県規模から、中規模の校内LAN、中小企業向けのLAN構築など幅広く行っていた。業

務の見学では県の基幹として稼動する通信設備を備えるビルや光ケーブルの束などを見て非常に圧倒された。他にも或る学校のLAN設備を旧校舎から新校舎へ移設する工事、経済産業省で進める全世帯対象の光通信普及100%への光回線の敷設計画における会議、IPCのLANの保守作業の見学も行った。

実習としてはLinuxを使用した医療事務システムの構築、仮想の大規模LAN仕様書に実際のカatalogからの機器選定と見積もりを行った。

十日間の実習の締めくくりとして、先々での担当者の方々が集まり、実習の内容と学んだことの反省会を行った。業務体験では会社組織の雰囲気だけでなく、現場でなければわからないことも見る事ができた。通信業界の最大手の設備は、信頼性が高く、高質な通信を確保するために大規模なものであり、現物を見る事ができたことはとてもよかった。SEは書類の作成も大切だが、その前にコミュニケーション力が会社内でも取引先との打ち合わせでもとても必要だと実感した。

インターンシップ体験記

産業システム工学専攻
2年 佐久間 勇行

私は今回の平成19年9月3日(月)～9月14日(金)の十日間、福島製鋼株式会社にてインターンシップで伺いました。私が今回、インターンを志望した理由は、私は大学の授業で産業を学習しているにもかかわらず、工場を見学で回った程度でしかなく、現場で体験することで業務内容と現場の雰囲気を感じてみたいと思ったからです。

私がまず工場を訪れて感じたことは「男の現場」ということでした。工場内は鉄を溶かすための大型炉が赤く沸いており、大きな鉄製品が並んでいました。その中で社員の方が鋳型を作ったり、溶接をしたりして働いていらっしゃいました。訪問した残暑の残る九月に汗をかきながら一生懸命に働く姿に仕事の大変さを感じました。また、私が技術員グループの方と一緒に現場をまわっている時、頻りに現場の方が話しかけてきて製品の具合や気がついたことなどを熱心に議論しているのを見て、生産を管理する側と製造側がコミュニケーションを大切に品質を保持・向上させているのだと感じました。大学の授業では科学式や物理の方程式で評価しているのに対し、産業界では式では書き表さない部分に問題が出てきます。例えば、重さ100kgの鋳物製品に対しほんの1mmの小さな砂粒が噛んでいても不良になります。不良が発生すればコストが増大してしまうし、万が一お客様に行ってしまうと事故につながる危険性があります。製品にいかに責任を持つことが大切かも学ぶことができました。実習の後半には、私も鋳物の製造を体験させていただきました。自分で砂を固め作った型に溶湯を流し込み灰皿を作りました。型から自分で作成した灰皿を取り出すときにもものづくりは面白いと感じました。表面はポツポツと穴が空いている部分もありますが、そこも気に入っています。

この実習を通しものづくりの難しさや楽しさを学ぶことができました。私も大学で基礎知識を学び、将来製造業の第一線に立って一生懸命働ける人材へと成長したいです。



環境システムマネジメント専攻
3年 東条 聡子

私がどうしてインターンシップに参加したのかというと、就職活動をするために何かきっかけが欲しかったからです。「就職」とただ漠然に思い描いているものはありましたが、インターンシップに行くとは決断する前は、将来の私が働いて社会人として生活しているという姿を想像しにくかったですし、また社会に出なくてはいけないという現実から目をそむけていました。インターンシップを終えた今でも、働くことをよく理解できているとは到底言えませんが、私の意識の中に「就職」というものが強く根付いたことを感じています。私は、インターンシップを自分の意識改革と就職活動の足掛りとすることができました。

また、自分が好きなことを仕事にすることについて分からない事や迷い、不安が多すぎたので、その解消につながるかと思って参加したという面もあります。私の研修先は福島市小鳥の森で、そこでは財団法人日本野鳥の会が福島市から事業を委託されて、小鳥の森の管理運営を行うという形をとっています。自然環境に関わる仕事に魅力を感じる一方で、そういったところで就職することには戸惑いを感じていたため、この機会に実際に職場の雰囲気を肌で感じるためのチャンスだと思いましたし、現場で働く人の話を聞きながら自分も働けるというのは大変貴重な体験になると考えました。小鳥の森では展示作業や環境調査、展示物作成、来訪者対応といった仕事のお手伝いをさせていただき、私はそれらの体験を通して環境教育の必要性やコミュニケーション能力の重要性を学びました。今では就職することに対して少しずつ考えがまとまっています。

たった一年半後には、これまでとは違う、学校という囲いのない社会へ飛び出すようになります。誰もが期待と不安に押しつぶされそうになりながら通っていく就活の道ですが、インターンシップに関わらず、自分から積極的に何にでも挑戦することで乗り越えたいと思います。



小鳥の森にてネイチャーセンター脇の池で児童がザリガニ釣りを行っている

学生交流会

理工学類学生生活委員会

2007年10月17日(水)の午後に、学類長賞の表彰式と受賞者によるプレゼンテーションをL1教室で行った後、生協の2階大集会室に会場を移して、学生と教員による交流会を、軽食による立食パーティ形式で行いました。

交流会の開催時期は、当初5月30日(水)を予定していたのですが、はしかによる休講措置のため、やむなく10月に延期しての開催となりました。学生と教員合わせて124名の参加者があり、学生自治会の企画による楽しいゲームなどの工夫により、とても盛り上がった会となりました。

た。交流会の目的である、同学年、上級生と下級生、学生と教員、それぞれのコミュニケーションを促進することができたと考えています。



後援会の主な事業内容

4/7	定期総会
4/18~11/23	課外・教育研究活動
5/7~2/8	グループ交流会
5/7~2/28	資格・検定受験料補助
5/23	学業優秀者表彰
8/5	オープンキャンパス
9/28	「後援会だより5号」発行
6/29~3/5	企業・工場見学
9/13~9/25	海外演習
10/10	インターンシップ報告会
10/17	学類長賞表彰
10/17	学類交流会
11/3	親のための就職セミナー
11/3~4	福大祭
12/9~12/16	専攻交流会
3/27	「後援会だより6号」発行
3/29	理事会



資格試験受験料補助について

「日頃の勉強の延長線上で」あるいは「就職を見据えて」、各種資格試験・検定を受験する学生に補助金を出しています。結果(合格・不合格)は不問です。本年度の受験実績は下記のとおりです。

資格・検定名	受験者数
技術士補	11
各種情報処理技術者	11
乙種危険物取扱者	7
甲種危険物取扱者	2
ピオトップ管理士	6
公害防止管理者の有資格者	2
環境計量士	1
ボイラー技師	1
消防設備士	1
宅地建物取引試験	1
TOEIC	17
日商簿記	5
秘書検定	2
ドイツ語検定	1
珠算検定	1
数学検定	1
環境社会検定	1

平成20年度総会のお知らせ

日時：平成20年4月7日(月) 10:50~12:00
場所：福島大学 L-3教室

● ご意見・ご要望は下記共生システム理工学類後援会まで
● 事務局 〒960-1296 福島市金谷川1 TEL&FAX 024-548-8176
● 福島大学理工学群共生システム理工学類内
● 学類のHPでさまざまな教育・研究活動をご覧ください。
● <http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/>